

韓国の梨花女子大学で客員教授として1年間数学の講義を担当し、昨年帰国した。学生数2万人（このうち学部生は1万5000人）を擁する世界最大の女子大である梨花女子大は、日本をしのぐ学歴社会といわれる韓国にあってトップ5を競う有力私立大である。日本の大学に例えようと、早慶などに相当するといえればそれほど遠くないだろう。

私の担当した講義は理工系1年生の一般教養科目「微分積分学」と、数学科3年生の専門科目「位相空間論」だった。韓国で講義を担当したと言つと「韓国語ができるのですね」と言われるが、そうではない。私は英語教育のため英語で講義する教員として雇われたのだ。

韓国の多くの大学で、一般教養科目の数学は、同一内容の講義が韓国語と英語の両方で開講され、学生がいずれか一方を選択できるようにになっている。学生は英語を選択する方が、成績評価の最上ランクである「A」がつく確率が高い。科目ごとにAを与えられる学生数の割合が、英語科目は韓国語科目よりも高いからだ。

半数の講義、英語化へ

韓国の主要大学

梨花女子大の微分積分学を例にとると、英語の講義では45%の履修者にAを与えることが許されていたが、韓国語の講義では35%だった。このため、よい成績を目指す学生は自ら進んで英語の講義を選択する。

英語に熱心なのは梨花女子大だけの話ではない。韓国では現在、いくつかの主要大学で全授業の30%程度が英語で開講されている。大学としてこれを50%にまで引き上げることを目標にしている。

日本の大学教員にこの話をすると、必ず驚かれる。そして、こんなシステムが日本では機能するはずがないと誰もが口をそろえる。仮に日本の大学で一般教養科目の微積分を英語で開講したとしたら、きつと授業は成り立たないだろう。

日韓の若者の英語力に歴然とした差があることは論を待たないが、いったいどれだけの日本人がこの事実を認識しているだろうか。ちなみに韓国の若者の間では「日本人は英語が下手」なことは定説となっている。

（東洋大学教授 小山信也）